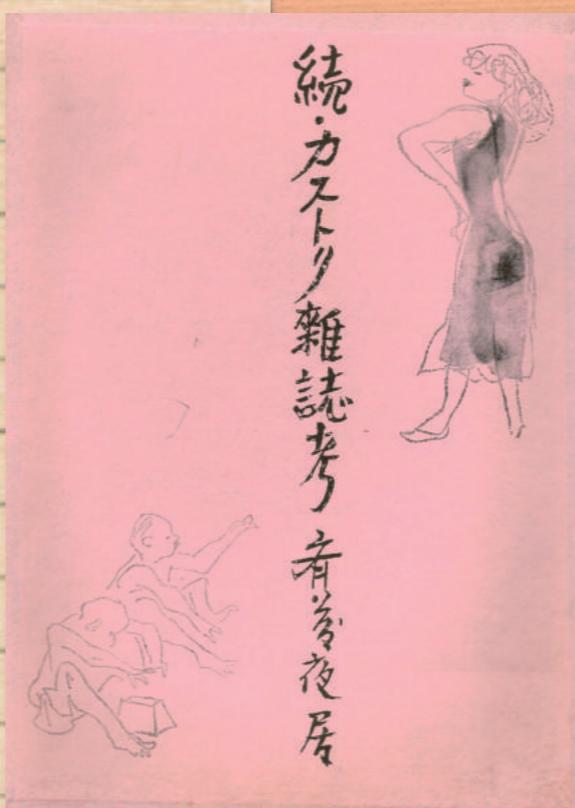
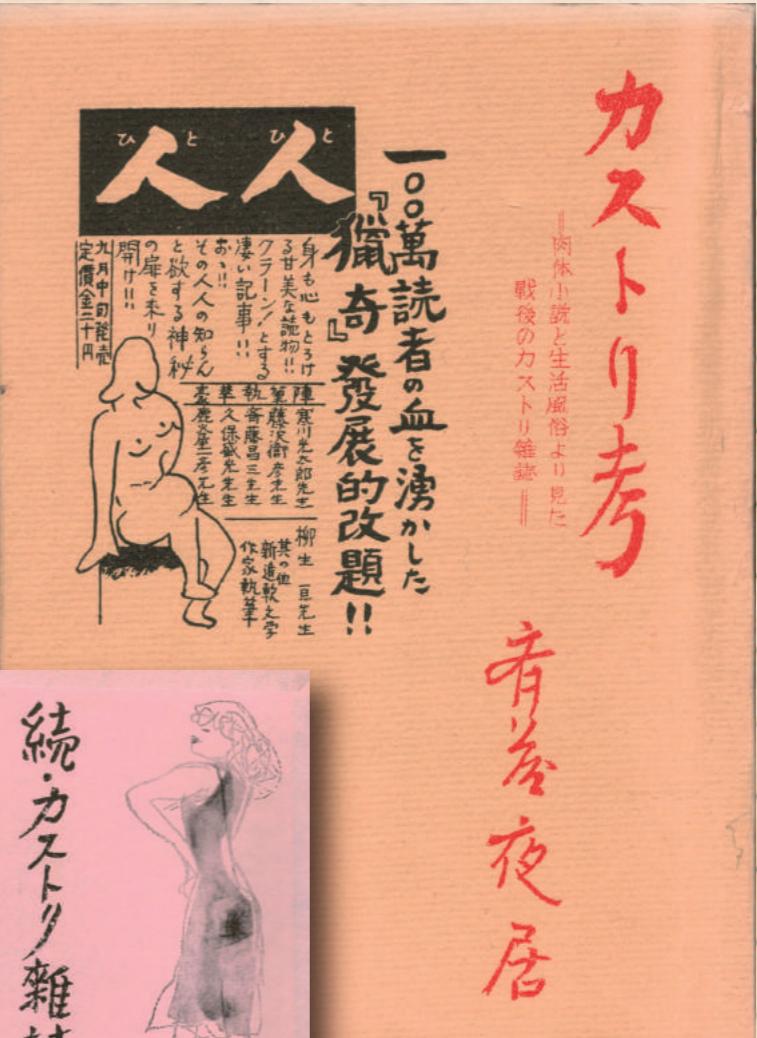


カストリ雑誌考【完全版】

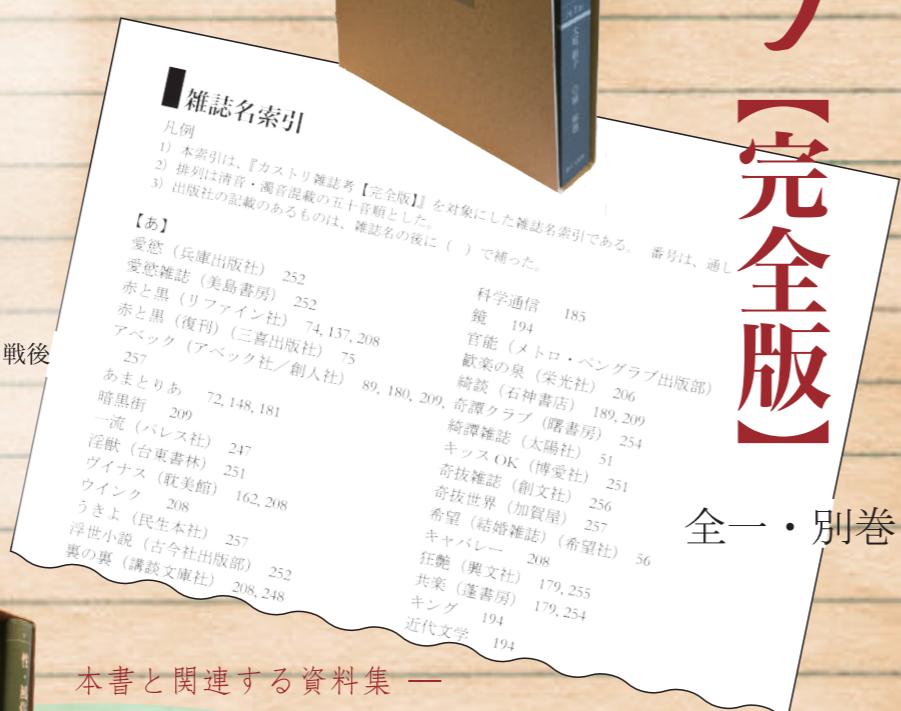
全一・別巻
〔編集復刻版〕



愛書家・古書店経営者として知られる斎藤夜居(1924-1988)が私家版で発行した戦後カストリ雑誌に関する論考を編集し、一書に集成。付録資料として、本書で引用したカストリ雑誌の出版状況がわかる記事を収録。「趣味」として発行された限定ガリ版誌を「研究」資料として、ここに共有資源化する試み。

カストリ雑誌考【完全版】

全一・別巻



本書と関連する資料集一

谷永永一編・解題 摘価80,000円
『性・風俗・軟派文献書誌解題集成—近代編』全四巻

ひとびとの暮らしにとって身近な問題であり、古今東西大きな主題であり続ける「性愛」に関する類書なき書誌解題集成。

◎豊富な記述の書誌解題.....

昭和初期の軟派出版、変態研究、獵奇雑誌といった風俗発禁本の主役のみならず、それらの背後に広がる趣味誌・会誌・限定本といった趣味家のネットワークによる出版物まで約3,000点を網羅する。

全四巻を横断する書名・著者・出版社名索引、筆禱書名発行年順一覧を新たに作成する。

ヴィジュアルイメージからカストリ雑誌の世界へといざなう本書
斎藤夜居が明らかにしようと試みるのは「カストリ精神」、
すなわち敗戦後の「時代精神」である。

本書活用法.....

「カストリ雑誌研究」にはもちろん、さらに

- 明治期から続く趣味家、愛書家という主体が紡ぎ蓄積してきた「知」、いわば「趣味」としての「研究」の系譜を捉える歴史社会学的な研究の方向性
- 戦前から戦後のアウトサイダー的な出版人の人的ネットワークを捕捉
- 「カストリ雑誌」を戦前雑誌文化との連続／断絶において再考

など「性」・「風俗」の領域への近代出版メディア史にも有効。

文庫文献類従63

編・解題ー大尾侑子 (日本学術振興会特別研究員PD)
造 本ー A5判 紙上製函/並製(別巻のみ) 総352頁
価 格ー 摘価 20,000円
刊 記ー 2018年9月 ISBN978-4-909680-02-0

【第一巻】274頁

『カストリ考—肉体小説と生活風俗より見た
戦後のカストリ雑誌』(此見亭書屋、1964年)

『続・カストリ雑誌考』(此見亭書屋、1965年)

【別巻】78頁

ISBN978-4-909680-03-7 (別巻のみ分売可 2,000円)

附録資料

愛住三郎「カストリ雑誌興亡史」
(秘版艶本の研究)『別冊・人間探求』1952年5月号、第一出版社

笠野馬太郎編「戦後取締られた風俗出版物総目録」
(『近世庶民文化』21号、近世庶民文化研究所、1954年2月)

笠野馬太郎編「続 取締られた風俗出版物」
(『近世庶民文化』22号、近世庶民文化研究所、1954年4月)

内容見本『カストリ考—肉体小説と生活風俗より見た戦後のカストリ雑誌』/『続・カストリ雑誌考』

新組附録資料

解題「『カストリ雑誌考【完全版】』復刻の意義と斎藤夜居の仕事」
出版社名/雑誌名索引



金沢文庫閣

〒920-0867 金沢市長土原2-16-30 口書店様へ…ありがとうございます 直接小窓までお申込みください
Tel 076-261-8884 Fax 233-3111 国版はすべて本書より 値段は税別 049/10/4000

戦後70年が過ぎ、「平成」という一時代が終幕を迎えるいま、
<敗戦/終戦>の記憶を刻み込んだ「カストリ雑誌」は、
文学研究、メディア研究、都市研究、社会学、美術史といった
学際研究の尖端においてその存在感を放っている。

日本社会で出版文化が華々しく花開き、読書の大衆化が進んだ1920年代。関東大震災後、出版資本主義の到来とともに産声をあげた齊藤夜居は、まさに近代日本の出版史とともにその人生を歩んだ人物だった。奇しくも1988年に鬼籍に入ったことは、「昭和」という時代の終焉とともに、猥雑さと可笑しみに満ちた昭和出版史の「裏面」の最期を象徴しているように思えてならない。戦前昭和の軟派出版界と、その世界を牽引し「趣味」の世界から「研究」を続けた出版人の解剖に大きなエネルギーを費やしてきた齊藤は、自らが探求した人々の粋な魂を戦後受け継いでいった人物のひとりである。「市井の研究者」として齊藤夜居が残した著書がいまもなお色褪せるずに参照され続けていることは、官学アカデミズムが「性」や「風俗」にかかるわる「知」を排除してきた歴史を鑑みれば極めて皮肉な事実といえる。

そんな書物に愛情と執念を注いできた齊藤夜居の著書は、「紙」（という物質性）の意味を問い合わせてくる。カビ臭く誰とも知らない人間の汗や脂が染み込んだ薄汚れた雑誌の美しさ、地上に数百冊しか存在しない限定本に触れた瞬間に経験する靈的なエネルギー、活字の向こうに広がる過去への想像力を教えてくれる。本復刻版資料からも、そんな「モノ」としての書物がもつ時代を超えた躍動が感じられるはずである。

戦後70年が過ぎ、「平成」という一時代が終幕を迎え、〈敗戦／終戦〉の記憶を刻み込んだ「カストリ雑誌」はさまざまな研究領域においてその存在感を示しあじめている。今回の復刻刊行も、こうした時流に棹さし後学に資するものであることは間違いない。

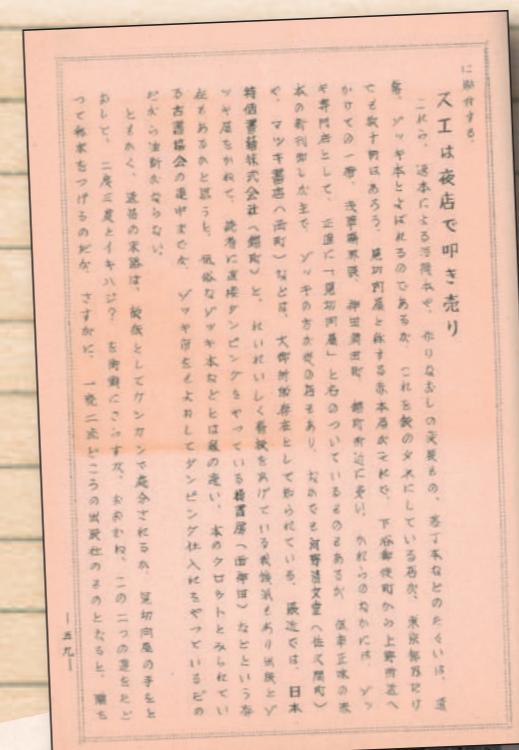
本書解題より

一 戦後ヒカルノ雄志延年まで

日本のお取扱い、カストリや筆記の筆やかになりし全盛時代に、ある商業筆記の若い出版社社長が、大阪から裏金販行の署りだ、と云つて大人の日本橋の古本屋に立寄った。リュックサックを背負い片手にミカソ探す意地でくつた荷物を下げていたが、荷中の食は全部ヤミ食煙呑目で藏したま、ミカソ探の中味はざつしり詰め込まれた新田義理だったといふ。さぞかし驚異と思ひたことであろう。

また、私は先日（昭和三十九年九月二十一日）帝堺白の高橋先生（日本生活心理学會）に再度お会いした折の談話のうちに、雄蕊『赤と星』や『人間復興』の事実上の癡行者は、一二三の青年たちが資金を挿したもので、画家奉年義一氏でも高橋先生でもなかつたとの由、つまり喫茶番組にさせば、善説發行という对社会言論發表の意を表示せられたことにより、先生方大いに迷惑に年少事案駄たち、義理の所持アフレケールと云ふべき青年たちの經營するところであったと、何やら多く飯をたがらずに舌足笑せられていた、へこのことの詳解は後の項目に於いて述べた。――また、私信ではあるが

雑誌の「内容」以上に、「形式」の同一性によって
“読む”という営み（=読書行為）が
成立していたという夜居の指摘は、
メディア論的な問題設定も備える。



夫婦離離にお株をとられて、さ
しも盛んであったカストリ難波も
当今は殆んど見ひでぬまつ
たようですね。A五倍版で「一九
はたか」廿二から八〇ページ
までのセンカ紙を使つたへら
のものが、表紙は乳房とお尻が
馬鹿にでかくて腿が太く足が長い
と云う、怪物のような裸女が腹百
もなく丁寧とこちらを色氣たっぷ
りで艶めでようう色風りで
ハアタリをかけている姿は、何と
もアブレ・ゲール的でもの凄じか
つたですね。

The image consists of two parts. The top part is a woodblock print illustration of a woman in a traditional Japanese setting, possibly a garden or a room with sliding doors. The bottom part is a newspaper clipping from the Asahi Shimbun. The clipping features a caricature of a man and a woman, and an article with Japanese text. The title of the article is '興亡史' (Eiga no Sei-ji) and the subtitle is '映画の評論' (Eiga no hyōron).

いろいろなものでなくエロ読物を中心としたカストリ雑誌への胎動が始つたのでしよう。
そこで「赤と黒」辺りからの序曲カストリ雑誌並にそれ以後に連なるものと思ひだしして書き並べてみます。資料がないので、記憶が主となるので書點学的なことはできませんが。

○「りべらる」昭和廿一年三月頃
太虚堂から創刊された雑誌だが、エロチズムを採り入れたところでは、その当初は今日のような様色物が賣物ではなかつた。直表紙の英会話コントが大いにインチリに受けたらしい。「一時休刊して、再刊してから大いに探訪や騒ぎ記事で賑つて今日に到つている。

○「赤と黒」昭和廿一年九月に創刊号がでている、岸井義一氏と高橋鉄氏のコンビでリファイン社が発行所になつていてアート系の表紙は決して當時としてカストリ級ではない。林驥、江戸川乱歩、大根惹二氏などが執筆している。

研究者」の仕事を支える、「趣味人」としての斎藤夜居

これまでカストリ雑誌が「学問」の対象として積極的には論じられてこなかった。しかし近年、この文化を再評価する動きが活発化しており、学連携の企画展示が活発に行われるなど大きな転換点を迎えている。

男と女は結婚することに依つて人性の悩みを解決すべきだ、と云う議論は實に明解であつて、誰にも判り易く、第一手ツ取り早くて良い。性慾の問題は、結婚して世帯を持つて愛児を得ればオーケー、という論は簡単であり、聽いていても實に気持が良い位に、愛樂な人生術で、人間は誰でも物事はあんまり難かしく考えない方が長生きするので、此の世も天国も、生きていろのかへ人生へだと悟ることである。前で、人生問題の大半は性慾問題であるから、新聞や雑誌の紙面で、隠れたる多數読者を獲得している、例の身の上相談という人氣者、アレは正確には身の下相談だと謂われる位だ、人間は人の誰もが持つている、別に不思議でもないへ一件の話題が好きだ。

然し乍ら、ままならぬから愛世と云う、本当のことを教えてやろう、男と女は結婚したことからと云つて、性の悩みは解決出来ないし、愛児が生れたからといって、家庭は幸福にはならぬないのである、嘘だと云う人は、男でも女でも静かに自身の胸に手を当てて考へて見るがよい………だからそんなことは先々のことであつて、若い男女は先づ結婚しなくてはいけない。

四 結婚雜誌『希望』

